日本におけるチンパンジー (*Pan troglodytes*) 飼育の初期の歴史 1920-1950 年

落合知美¹⁾・綿貫宏史朗^{1), 3)}・鶴殿俊史²⁾・森村成樹²⁾・平田聡²⁾・友永雅己^{1), 2)}・
伊谷原一^{2), 3)}・松沢哲郎^{1), 2), 3)}

1) 京都大学霊長類研究所

2) 京都大学野生動物研究センター

3) 公益財団法人日本モンキーセンター

はじめに

現在、日本では動物園や研究所施設でチンパンジーが飼育されている。これらのチンパンジーはすべて、公益社団法人日本動物園水族館協会（以下、日動水）により血統登録され、年に1回の調査により更新されている（吉原，1999）。

大型類人猿情報ネットワーク（Great Ape Information Network 略称 GAIN（ゲイン））は、2002 年度よりチンパンジーの情報整備をおこなってきた。日動水の協力を得て国内血統登録書の情報をもとにデータベースを作成し、各個体の行動情報やゲノム情報などを追加してウェブサイト <http://www.shigen.nig.ac.jp/gain> で公開している。

また、過去にさかのぼり、血統登録書には掲載されていない、すでに死亡している個体の調査をおこない、データベースへの追加をすすめてきた。日動水によってチンパンジーの血統登録が開始されたのは、1980 年代だが（吉原，1999），その時すでに死亡していた個体の情報は、積極的に集められてこなかった。過去の飼育情報については、飼育園館で保管されたり、新聞報道や著作物として残っていたりする場合もあるが、こうした情報を整備した資料もなかった。特に第2次世界大戦前の記録は、戦争時の空襲などにより失われたものも多く、飼育の歴史を知るだけの資料に乏しい（石田，2010）。つまり、日本にきたチンパンジーの記録を、戦前から今日までたどることはできず、現在飼育されているチンパンジー個体群がどのように形成されてきたのか、その過程には不明な点が残されている。

そこで、本稿では戦前から戦後にあたる時期のチンパンジーの飼育の歴史をまとめることで、日本における飼育初期のチンパンジーの歴史を明らかにし、飼育初期における飼育記録の整理を試みた。

方法

日本におけるチンパンジー全体の概要を把握するため、チンパンジー飼育施設を実際に訪問し、ヒアリング調査をおこなった。調査期間は、2003 年1月から2008 年3月、訪問した飼育施設は58 施設である。施設の選定は、日動水によってまとめられた国内血統登録書（1983 年から2012 年）を参考にした。ヒアリングでは、訪問飼育施設に動物園の所属や運営、飼育方法や飼育個体などについての情報収集をおこなった（落合-大平，2009）。また、過去に飼育した個体について確認をおこなった（落合-大平ら，2006；綿貫ら，2014）。動物園で保管されている「個体管理簿」や「飼育台帳」、飼育員によって記録されている「飼育日誌」などの資料の確認も、可能な範囲でおこなった。

2007 年度からは、血統登録書やヒアリング調査などから得られた情報をデータベース化する作業をおこなった。その結果、個体ごとの経歴や家系図の把握が可能となり、2012 年10 月には飼育施設ごとの飼育経歴の情報管理も可能となった。そこで、このデータベースを利用して、年代ごとの飼育個体数や一時的な出園（ブリーディングローンでの貸与など）などについて確認作業をおこない、過去の飼育個体について血統登録書との照らし合わせをおこなった。

2010 年度からは、国内血統登録書に未掲載個体の調査を目的として、動物園などに関わる古い資料の内容確認を重点的におこなった。「チンパンジー」や「動物園」をキーワードに古書の検索をおこない資料を手に入れたり、国立国会図書館などで資料を閲覧したりした。新聞記事は、朝日新聞オンラインデータベース「聞蔵Ⅱビジュアル」の「朝日新聞縮刷版 1879～1989」（1879 年1月～1989 年12 月本社発行記事を中心に収録）や「アサヒグラフ 1923～1956」（1923 年1月～1956 年12 月

表1 1950年より前に日本で飼育されていたチンパンジー

来日年	死亡年	名前	性別	GAIN番号	飼育場所
1	1921※	(1921) 不明	不明	9999	イタリアのバイサックスサーカス。別府や神戸をまわる
2	1926	(1926) 不明	♀	9998	横浜に寄港した採集家リスタニーのペット
3	1926	1927 太郎	♂	9060	リスタニーから購入し、中田和平氏が飼育した後、大阪市動物園へ
4	1931※	(1931) プリンス・コンゴ	♂	9997	国産振興北海道拓殖博覧会に招かれたテレル夫人のペットとして来日
5	1931	1940 リタ	♀	9061	大阪市動物園(香川勇氏経由)
6	1932	(1932) 不明	♂	9996	アメリカの興行師とともに来日
7	1933	1934 八郎	♂	9170	鶴舞公園動物園(ドイツの動物商ハーゲンベックから購入)
8	1934	1935 ヒス	♀	9139	大阪市動物園(香川勇氏経由)
9	1934	1939 二郎(チビ)	♂	9050	大阪市動物園(香川勇氏経由)
10	1934	1941 三郎(ソバカス)	♂	9138	大阪市動物園(香川勇氏経由)
11	1934	1942 ロイド(勝太)	♂	9100	大阪市動物園(香川勇氏経由)
12	1934	1936 トミー	♀	9064	京都市動物園(中田清一氏経由)
13	1934	1937※ オペラ	♀	9256	甲子園阪神パーク(中田清一氏経由)
14	1935	1935 不明	♂	9125	神戸市動物園(山田学氏経由)
15	1935	1935 不明	♀	9126	神戸市動物園(山田学氏経由)
16	1935	1936※ 不明	♀	9258	山田学氏の手元で飼育
17	1935	1942※ 不明	♂	9257	鶴舞公園動物園(山田学氏経由)。1937年に東山動物園に移動か
18	1935	(1935) スヌーキー	不明	9995	復興記念横浜大博覧会の余興としてカウボーイの一行とともに来日
19	1935※	不明※ 不明	♂	9994	サーカスの有田洋行がアメリカから購入
20	1936	1943 マル	♂	9065	京都市動物園
21	1936	1938 ジョンパー	♀	9105	熊本市動物園(ドイツの動物園より)
22	1938	1939 ラインハルト	♂	9091	上野動物園(ドイツのダーニッシュより)
23	1938	1939 パピイナ	♀	9092	上野動物園(ドイツのダーニッシュより)
24	1940	1940 不明	不明	9140	大阪市動物園リタの死産子
25	1940※	1955 バンブー(正二)	♂	9018	甲子園阪神パーク(神戸に寄港した船より)。1943年に東山動物園に移動
26	1941	1941 不明	♂	9093	上野動物園(ドイツのダーニッシュより)。1941年に熊本市動物園に移動
27	1941	1943 不明	♂	9094	上野動物園(ドイツのダーニッシュより)
28	1941	1945 不明	♀	9095	上野動物園(ドイツのダーニッシュより)

Note. すべて血統登録書には未掲載の個体。図書資料や新聞記事、動物園の飼育台帳などからの情報をもとに作成。来日年、死亡年の推定年には※を付けた。死亡年欄の()は、海外から一時的に来日した個体の帰国推定年を示す。

発行の雑誌アサヒグラフを収録)、読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」の「明治・大正・昭和」(1874年11月～1989年12月東京本社発行の全国版記事を収録)などを利用して検索をおこなった。大阪市中央図書館や名古屋市鶴舞中央図書館などを訪問し、郷土資料を確認した。動物園の図書館や資料庫などで、動物園が所有する蔵書内容の確認もおこない、各飼育施設の年報や「創立50周年」などの記念誌の内容も確認した。2013年9および10月には日動水の事務所を訪問し、資料の閲覧をおこなった。

また、追加調査が必要な施設に関しては、随時施設を訪問して調査をおこなった。こうして得られた情報の中から複数のソースが確認されるなど信憑性が高い情報のみを取捨選択し、GAINのデータベースに登録した。血統登録書に記載された個体については血統登録番号を利用し、未記載の個体についてはGAINオリジナル登録番号を作成して、個体情報が集約されたデータベースの構築をおこなった。また、データベース上での見直し作業をおこない、情報の整合性について確認をおこなった。

結果

調査によって、第2次世界大戦前(1945年以前)に、日本で28個体のチンパンジーが飼育されていたことが明らかになった。すべての個体が、血統登録書に掲載されていない個体だった。これらの個体の情報を、表1に示した。

サーカス出演やペットとして一時的に来日した個体が6個体、動物園など日本での飼育のため輸入された個体が21個体、死産が1個体確認された。動物園への21個体のうち、3分の1(7個体)が1年以内に死亡した。残りの半数以上(9個体)も5年以内に死亡した。残りの4個体は7～8年生存し、10年以上生きた個体は東山動物園の「バンブー」1個体のみだった(推定14年間生存)。

戦前の日本におけるチンパンジー飼育の概要は、次のようになる。1920年代に、動物園でチンパンジーの展示が初めておこなわれた。1930年代に、各地の動物園にチンパンジーの輸入が試みられ、動物園で継続してチンパンジーが飼育されるようになった。1940年代には、戦争の影響で輸入が途絶え、飼育が困難となり、国内の個体数は減少した。チンパンジーの輸入は1951

年に再開するが、それまで生き残ったチンパンジーは、バンブーのみだった。以下に、年代ごとに分け、それぞれの出典情報とともに当時の飼育の詳細をまとめた。

日本の動物園にきたチンパンジー（1920年～）

本や資料などによる調査では、日本に初めてやってきたチンパンジーとして、1927年（昭和2年）に大阪市動物園（現在の天王寺動物園）にきた「太郎」と記す文献が多い（筒井，1934；吉田，1980；堤，2003）。大阪市動物園も太郎を「日本初」もしくは「日本初渡来」のチンパンジーと記載しているし（大阪市動物園，1934；林，1965；大阪市天王寺動物園，1985），長期に渡り国内血統登録担当者であった吉原耕一郎氏も，「日本におけるチンパンジー飼育の歴史は，1927年に大阪の天王寺動物園に始まり，1938年の東京上野動物園へと続く」と記している（吉原，1999）。

しかし高島（1955）は，著書「動物渡来物語」で「黒猩猩は大正十年頃パイサックというイタリアのサーカスが連れて来て，九州別府に開かれた博覧会の余興に見せたのが最初である」と記している。また，「次は大正十五年横浜に舶来した二頭の黒猩猩の内，小さい方の一頭を神戸の動物商中田氏が買入れ其の年の11月から約10箇月自分で飼養した。昭和二年大阪市立動物園に入り太郎と呼ばれたが風邪をこじらせて在園数箇月で死んだ」とも書かれている。これとほぼ同様の内容が，筒井の論文（1934）にも記されており，舶来したのは「世界遊覧船に乗ってきたニューヨークの採集家リスタニー」と記されている。以上より，1921年にはサーカスに連れてこられたチンパンジーが，そして1926年には2個体のチンパンジーが日本に来ていた。そして，1926年に来た2個体の内の1個体が1927年に大阪市動物園にいた太郎ということになる。

太郎が大阪市動物園に入った経緯については，毎日中学生新聞編集部（1950）がまとめた「動物園奇談」に詳しい。同園初代園長の林佐市氏から聞いた話として記載されている。動物商の中田和平氏が，横浜に日本見物に来たお客さん（筒井（1934）に記されるリスタニーのこと）が飼っていたヴァイオリンをひく子連れのチンパンジーを見つけ，キジやタヌキ，サルなどの動物と交換で子供のチンパンジーをもらいうけて神戸に戻った。それを中田和平氏の家を訪れた林園長が見つけ，動物園に入れた，という経緯だそうだ。

公開された「太郎」の人気は凄まじく，「閉園時間を1時間延長しても入園者が多くて太郎を見ることができず，病床まで見物人がおしかけるありさま」（林，1965；大阪市天王寺動物園，1985）で，そうした状況が祟ったのかわずか1ヵ月で死亡する。「お客さんにおめみえしてから，わずかに十七日間だった」（毎日中学生新聞編集部，1950）という文章からも，その大きく

も短かったブームがうかがい知れる。

1927年当時，日本にあった公立動物園は，上野動物園（1882年開園），京都市動物園（1903年），大阪市動物園（1915年），和歌山公園動物園（1915年），鶴舞公園附属動物園（1918年），遊亀公園附属動物園（1919年），小諸市動物園（1925年）などである。「太郎」は“日本の動物園”が初めて所有したチンパンジーであり，「チンパンジーが見られるのは当園のみ」と広告され（大阪市動物園，1934），太郎が日本初のチンパンジーと広く理解されたのだろう。

以上より，日本に初めて来たチンパンジーは，1921年にイタリアのサーカスが連れてきたチンパンジーと推測される。1926年には，ペットだったチンパンジー2個体が日本に来ており，日本で初めて“飼育・展示”されたのが，そのうちの1個体であり1927年から大阪市動物園で飼育された「太郎」だったと言えるだろう。

大阪のリタ嬢と各地での輸入（1930年～）

太郎の死亡から5年後の1932年に，大阪市動物園にやって来たのが，「リタ嬢」である。「動物園に到着する前から歯を磨いたり，煙草を吸ったりすることを覚えていた推定4歳の雌チンパンジー」（和田，1965）は，動物園で「リタ」と名付けられて竹馬や自転車乗り，食事マナーのショーをおこなった（林，1965）。動物園も「日本一他所では見られぬ黒猩猩」と宣伝した結果，全国的に有名になり，1934年には過去最高の年間来園者250万人を突破した（大阪市動物園，1934；和田，1965；大阪市天王寺動物園，1985）。また，「ユニヴァーサルがわざわざ映画を撮りに来て全世界に紹介」（毎日中学生新聞編集部，1950）するなど世界にも紹介された。

筒井は，リタ嬢やその他のチンパンジーについて，「動物心理」の雑録に「類人猿雑記」および「類人猿追記」と題して，行動の詳細をまとめている（筒井，1934，

図1 舞台上で自転車に乗るリタ嬢（大阪市天王寺動物公園事務所提供）

1935a)。中には調教方法について述べた文章もあり、「訓練は相当きびしくする必要がある。甘くすると命令をきかなくなる。」と、チンパンジーが咬みつく危険性などについて記載している(筒井, 1934)。なお、この文章が掲載された雑誌「動物心理」は、日本動物心理学会が1934年から発行を始めた会誌であり、筒井の文章はその1号に掲載されている。

リタ嬢の人気で、チンパンジーを何とか手に入れようと全国各地の動物園が動き出した(青木, 2007; 佐々木, 1975)。そこで有名になったのが、動物商の香川勇氏や開業小児科医の山田学氏である(山田・山田, 1940; 上田, 1944)。香川氏は、リタ嬢を大阪市動物園に販売した動物商であり、1933年末にも再びアフリカに渡航してチンパンジーを入手し(上田, 1944)、1934年に大阪市動物園に「ロイド」「二郎(別名チビ)」「三郎(別名ソバカス)」「ヒス」という4個体を納入した(大阪市立動物園, 1941; 天王寺動物園飼育台帳より)。これらの個体は、大阪で自転車乗りや綱渡りのショーをおこなっている(東京朝日新聞 1935年1月13日の記事など)。香川氏はその後の1953年に、福岡市動物園が再開園する際の初代園長になった(大阪市天王寺動物園, 1985)。山田氏は、香川氏らからの刺激を受け、大阪や名古屋の動物園から資金援助を得て、1935年3月にアフリカに渡った(青木, 2007; 柏原, 2000)。山田氏のアフリカ行は新聞でも取り上げられた(大阪毎日新聞 1935年7月30日紙面、東京朝日新聞 1935年7月30日夕刊紙面(図2)など)。山田氏はそのアフリカ行でチンパンジー4個体を日本に持ち帰り、うち2個体のチンパンジーを神戸市動物園(当時の諏訪山動物園で、のち移転して王子動物園)に納入した(上田, 1944)。その際、予定と異なる元気の良い方のチンパンジーが間違えて納入されたということで、チンパンジー

に関する日本で初めての裁判を起こしている(上田, 1944)。

1933年には、名古屋市鶴舞公園付属動物園(東山動物園の前身)が、ドイツのハーゲンベック動物園からチンパンジー2個体を購入する。しかし、メスが航海中に死亡したため(北王・水谷, 1935)、オス1個体だけが動物園に到着した(筒井, 1934)。このチンパンジーは、公募により「八郎」と命名されたが(朝日新聞社社会部, 1977; 北王, 1943; 橋川, 2011)、翌年3月に肺炎で死亡する(北王・水谷, 1935)。1935年には、山田氏がアフリカから連れ帰った4個体のうちの1個体を購入したようだ(筒井, 1987)。1937年に動物園が鶴舞公園から東山に移転する際に、オスチンパンジー1個体が移動した記録がある(北王, 1943)。正確な資料がないため推測の域を超えないが、山田氏から購入した個体が数年生きており、東山に移動したのかもしれない。

1934年夏には神戸の中田清一氏がアフリカからチンパンジー2個体を連れて帰り、京都市動物園と阪神パークに納めた(筒井, 1987)。京都市動物園に入ったチンパンジーは当時園長を委嘱されていた京都大学の川村多実二氏により「トミー(富美)」と名付けられ、人気スターとなった(筒井, 1987; 京都市動物園, 2003)。トミーはカニクイザルの赤ちゃんをかわいがり(筒井, 1935a)、煙草を好んだ(筒井, 1934)。トミーは1936年に死亡するが、数ヶ月後には「マル」が来園し、トミーの後継者として期待された(京都市動物園編集委員会, 2013)。阪神パークに納入された「オペラ」については、阪神パークが2003年3月に閉園しているため、飼育の状態や死亡日などの情報を手に入れることは難しい。興味深いことに、他の動物園に入ったチンパンジーとは種が異なると思われるようだ。筒井(1935b)は、「リタをはじめ京都大阪のものは最も普通な種類 *Pan Chimpanse* Mayer であり、甲子園のだけが通称 *Bald Chimpanzee* と呼ぶ学名 *Pan calvus* Du Chaillu の子どもだろう」と記している。オペラの捕獲地は明らかではないが、リタは「ベルギー領コンゴの東南端ウペンバ湖畔のブカマ」、大阪の他の4個体は「キヴ湖の西岸キヴ・ディストリクト産」で捕獲されたとの記録がある(筒井, 1935b)。こうした情報から判断すると、この頃日本に来ていたチンパンジーの多くが、現在のヒガシチンパンジー (*Pan troglodytes schweinfurthii*) 亜種に分類される個体だったと推測される(Oates *et al.*, 2009)。一方オペラは、成長に伴い額がはげ上がる特徴を持つチュウオウチンパンジー (*P. t. troglodytes*) だった可能性もある(岩本, 1987)。チュウオウチンパンジーは、以前ハゲアタマチンパンジーとも呼ばれていた。当時は、「肉食をするのは *Bald Chimpanzee* だけ」と理解されていたらしく、「来日したチンパンジーの中でオペラだけが、

図2 山田学氏がアフリカからチンパンジーを連れ帰ったことを記した新聞記事(東京朝日新聞 1935年7月30日夕刊2面より)

ハエやドジョウを好んで食べた」と記録されている（筒井, 1935b）。リタなど、当時撮影されたチンパンジーの顔写真では、顔全体の色が薄いなどのヒガシチンパンジーのこどもの特徴を捉えることができる（Fulk & Garland, 1992；山田・山田, 1940）。オペラの顔写真は、今回の調査では確認することができなかったため、形態的特徴からも判断することはできなかった。なお現在は、国内チンパンジーの亜種判定を、遺伝子による判定とその結果と血縁関係の照らし合わせによりおこなっている（篠田ら, 2003；Gonder *et al.*, 2011）。

1936年に熊本動物園（現在の熊本市動植物園）も、ドイツのハーゲンバック動物園との動物交換で「ジョンパー」という個体を手に入れ、2年ほど飼育している（熊本動物園, 1980；熊本動物園, 1989）。上野動物園が初めてチンパンジーを飼育したのはそれより遅い1938年である。ドイツの動物収集家ハインリヒ・ダーニッシュから、「ラインハルト」と「パピイナ」が、タンチョウとの交換により来園した（上野動物園, 1982）。このチンパンジーたちは、「そのうち自動車や自転車を乗廻したり日本の着物を着て箸で御飯も食べるやうになるだろう」と期待されたが（1938年2月2日読売新聞夕刊）、翌年6月にパピイナが（1939年6月8日読売新聞夕刊）、9月にはラインハルトが死亡した（1939年

9月10日読売新聞夕刊）。なお、当時の新聞など、名前の記載方法は様々で、「パピイナ」は、「フアテイラー」、「フアチーナ」、「サチーナ」、「パティーナ」などと記載されている。

これまで述べたように、日本の動物園に導入されたチンパンジー以外にも、ペットやサーカスとして来日したチンパンジーもいる。1931年5月12日の東京朝日新聞の朝刊には、「世界一の女おなじみのテレル夫人」が類人猿の「プリンス・コンゴ君」をつれて帝国ホテルに来たとの写真と記事が掲載されている（図3）。テレル夫人とは、1931年7月12日から8月20日に札幌で開催された国産振興北海道拓殖博覧会の場内呼物のために来日した、体躯の大きな女性である（国産振興北海道拓殖博覧会の絵葉書などより）。その夫人が来日時にペットのチンパンジーを連れて来ており、東京のホテルに滞在した際の様子が報道されたものと推測される。

アメリカから来たサーカスが、チンパンジーのショーをおこなった記録もある（筒井, 1935a, 1935b, 1987）。1932年に来日したアメリカの興行師は「傘をさして綱渡りをし、人間と catch-ball」をする大きなオスチンパンジーを連れており、それを見た筒井はリタ嬢の芸を仕込むヒントにしたそう（筒井, 1934, 1935b）。1935年には、アメリカカウボーイのサーカスがチンパンジーを連れてきている（筒井, 1935c）。これは、この年の3月から5月に横浜の山下公園一帯で開催された「復興記念横浜大博覧会」の余興としてやってきたチンパンジーを指す（東京朝日新聞 1935年3月20日の記事, 東京朝日新聞夕刊 3月22日の記事より）。東京朝日新聞 4月7日の記事には「舶来リタ嬢：食後の芸術運動」との見出しで、チンパンジーが綱渡りをしたり自転車

図3 テレル夫人とプリンス・コンゴについて書かれた新聞記事（東京朝日新聞 1931年5月12日朝刊11面より）

図4 「大阪動物園から応援に来る類人猿」として掲載されたチンパンジーの写真（「横浜グラフ」1934年7月3日より 横浜市都市発展記念館作成の「WEB写真アルバム「横浜グラフ」昭和9年の横浜」に掲載された写真より提供をいただく）

に乗ったりする様子を写真付きで紹介している。なお、この博覧会が開催される前年の「横浜グラフ」(国際写真通信社発行)には、「復興博の添物に、大阪市動物園からチンパンジーが応援に駆け付ける」として、チンパンジー2個体の写真が掲載されている(図4)が、実際に大阪のチンパンジーが移動したのかについては、確認できなかった。

1935年に「サーカスの有田洋行がアメリカからチンパンジーを輸入した」との情報もある(筒井, 1987)。有田洋行(会)とは、明治時代から活動をおこなっていた日本のサーカス団である(阿久根, 1977)。その有田洋行が購入したチンパンジーが独自に海外から輸入された個体かどうかについては、確認できなかった。時期的なものを考慮すると、この横浜大博覧会に来ていた個体を譲り受けた可能性もある。しかし、これらのようなペットやサーカスで飼育される個体の場合、どれだけの期間日本に滞在し、その後どこに移動したかを確認することは困難である。

1930年代終盤になると、動物園も戦争の影響を強く受けるようになる。園内で防空演習をおこなうようになり(朝日新聞社社会部, 1977)、動物の餌や暖房用の

燃料を入手するのが困難になり、全国で餓死したり凍死したりする動物も出てきた(熊本動物園, 1989; 秋山, 1995; 京都市動物園編集委員会, 2013)。1939年の京都日出新聞には「石炭と肉の制限に頑張る岡崎動物園」という記事が掲載され、「動物たちも頑張っているのだから、私たちが頑張らなければ」という論調で書かれている(京都市動物園編集委員会, 2013)。動物園で飼育されていたチンパンジーたちも、戦争に協力するよう強制された。軍服を着、防毒マスクを付けて戦時下の意識高揚に利用された(大阪市天王寺動物園, 1985)(図5)。外来語は敵性語として排除する動きもあり、大阪市動物園の「ロイド」は「勝太」に、東山動物園の「バンブー」は「正二」に改名された(秋山, 1995)。

戦争とリタの出産(1940年～)

1940年、リタがロイドとの間に子どもを出産する。これは、国内初の出産記録となった。戦前に輸入されたチンパンジーは、生息地で捕獲された1～3歳の子どもであり、7割以上(21個体中16個体)が5年以内に死亡している。また、チンパンジーの母親に育てられたり、群れで暮らしたりした期間が短いと、正常な性行動ができない場合が多い(King & Mellen 1994; AZA Ape TAG, 2010)。そのため、繁殖可能な年齢まで成長し、出産までこぎつけることができたのは、当時としては非常にまれで、貴重な記録である(Earnhardt *et al.*, 2003)。しかし、結果は死産であり、次の日にはリタも死亡してしまう。(なお、和田(1972)には1938年にリタがソバカスとの間の子どもを妊娠したととれる記載もあるが、その後出産したという記録は見つかっていない)。2年後の1942年4月13日にはロイドも死亡し、これで大阪市動物園のチンパンジーはすべてなくなった。

1941年、上野動物園にチンパンジー3個体が導入される。これは1938年に上野動物園に「ラインハルト」と「パピイナ」を贈ったハインリヒ・ダーニッシュが、両個体とも死亡したと聞き、再びチンパンジーの来日を手配したものである(読売新聞1941年2月13日, 朝日新聞1941年2月13日)。サルやヒョウの子どもと引き換えに来日することになったチンパンジー3個体は、3月1日に鎌倉丸で横浜港に到着し(朝日新聞1941年2月13日), 翌日に上野動物園で公開された(朝日新聞朝刊1941年3月3日, 読売新聞朝刊1941年3月3日)。オス2個体のうち1個体は、上野動物園からすぐに搬出され(正確な日付は不明), 岸政右エ門氏を介し熊本動物園に移動したが、10日もせず歯槽膿漏による採食不能で死亡した(熊本市動植物園の動物整理簿の記載より)。上野に残ったオスは、1943年5月に死亡した。上野動物園では、1943年8月に東京都長官からの命令で「猛獣処分」がおこなわれ(小森, 1997; 上

図5 防毒マスクを付け防空演習をおこなうリタ嬢(1941年撮影 大阪市天王寺動物公園事務所提供)

野動物園, 1982), ゴウやライオン, トラ, ホッキョクグマなどが処分された。残ったメスのチンパンジーは, 終戦直前の 1945 年 7 月まで生きたとの記録があるので, キリンやフタコブラクダ, 何種類かのサル類とともに猛獣処分を免れたと思われる (小森, 1997)。

1943 年, 阪神パークから東山動物園にオスのチンパンジー「バンブー」が移動する。これは, 阪神パークが戦闘機生産用の飛行場に転用されることが決まったための移動だった (朝日新聞社社会部, 1977)。そもそも, バンブーが阪神パークに来たのは, バンブーがペットとして乗船していた油槽船 (オイルタンカー) が, アフリカからドイツに向かう途中に連合軍の潜水艦に追われて神戸港に逃げ込んだという経緯からである (朝日新聞社社会部, 1977)。バンブーは, 戦争が激化する中, 東山動物園で過ごすこととなった。絵本「ぞうれっしゃがやってきた」(小出, 1983) には, バンブーが空襲から逃れようと自転車でカバの檻に逃げるエピソードが記載されている。

この頃になると, 戦争の影響で, 海外からチンパンジーが輸入されなくなった。1943 年の上野動物園に始まった「猛獣処分」は, 日本全国の動物園でもおこなわれるようになったが (上野動物園, 1982; 和田, 1965; 秋山, 1995), どの動物園でも処分動物リストにチンパンジーが掲載されることはなかったようだ。これは, そもそも風邪をひきやすく短命だったので, 対処に苦労しなかったというのが事実だろう。秋山 (1995) は, 当時はほとんどのチンパンジーが短命で死亡しているが, その原因として飼育技術が未熟だった以外に, 職員の戦争への召集や空襲からの脅威などといったストレスが影響した可能性もある, と記している。

1945 年の終戦時に生きていたチンパンジーは, バンブーのみだった (橋川, 2011)。東山動物園の状況は, 「戦争を生き抜いたのは 279 種 961 点のうち, 象 2 頭・チンパンジー 1 頭・鳥類が 23 羽のみであった」と記載されている (朝日新聞社社会部, 1977)。そのバンブーも 1955 年, 推定 14 歳の時に肺炎で死亡する (千葉, 1993)。当時, 日本で 10 年以上生きたチンパンジーはいなかったの, バンブーの死因は「老衰による肺炎」と報道されたが (朝日新聞社社会部, 1977), 時には 60 年以上生きるチンパンジーにとって, 10 代での死亡は早すぎる死亡だったと言える。

1940 年には, 日本動物園水族館協会が任意団体として発足する。発足時の加盟園は, 朝鮮の京城動物園や台湾の台北動物園を含む 19 施設である (浅倉, 1994)。1941 年 6 月には, 会誌「動物園と水族館」の第 1 号が発行され, そこに各加盟園の飼育動物の個体数を記録したリストが掲載されている (表 2)。チンパンジーは, 5 施設で 7 個体が飼育されていると掲載されている (日本動物園水族館協会, 1941)。これらに当てはまる個体

表 2 日本動物園水族館協会会員 (1940 年) とチンパンジー個体数

会員名	所在地	チンパンジー個体数
仙台市動物園	仙台市	
東京市上野恩賜公園動物園	東京市	2
甲府市遊亀公園付属動物園	甲府市	
名古屋市東山動物園	名古屋市	1
中ノ島水族館	静岡県三津濱	
京都市記念動物園	京都市	1
大阪市動物園	大阪市	2
市立堺水族館	堺市	
阪神パーク動物園	尼崎市北城内	1
阪神パーク水族館	尼崎市北城内	
私立寶塚動物園	兵庫県	
神戸市立動物園	神戸市	
栗林公園動物園	高松市	
福岡市記念動植物園	福岡市	
到津動物園	小倉市	
熊本動物園	熊本市	
鹿児島市鴨池動物園	鹿児島市	
李王職昌慶苑	京城市	
台北市動物園	台北市	
その他		1
		8

Note. 個体数は日動水会誌「動物園と水族館」第 1 号 (1941 年 6 月 17 日発行) に掲載されていた数。5 園で 7 個体が飼育されていたと記載されている。実際は, 上野から熊本に移動した個体がまだ生きているのだが, 上野を出た日が不明で, 熊本には 1941 年 9 月に入っているの, 動物商にいた時期だと思われるので, 表には「その他」で記載した。

は, 上野動物園の 2 個体 (GAIN 登録番号 9094 番, 9095 番), 東山動物園の 1 個体 (9257 番), 京都市動物園のマル, 大阪市動物園の三郎とロイド, 阪神パーク動物園のオペラだろうと予想される。実際は, 上野動物園に導入後, 熊本動物園に移動したオスチンパンジー 1 個体も国内にいるはずだが, 岸政右エ門氏の手元にいたのか, 上野動物園にも, 熊本動物園にも数に入っていない。戦前のチンパンジーの個体数について書かれた他の資料としては, 筒井の論文がある。筒井 (1935b) には, 「現在日本には京阪神にかたまって六頭のチンパンジーがいる」と記載がある。これに当てはまる個体は, 大阪市動物園のリタ, 二郎, 三郎, ロイド, 京都市動物園のトミーと阪神パーク動物園のオペラだろうと予想される。

チンパンジーが再び輸入されるようになるのは, 戦争が終了し, 国内の情勢が落ち着いてきた 1951 年である。この頃になると, 新しい動物園が全国各地にできはじめ (林, 1956), これら多くの動物園でもチンパンジーの飼育が開始されるようになる。そして再び, 多くの“スター”がうまれる (札幌市教育委員会, 2000; 福岡市動物園, 1993; 豊橋総合動植物公園イベント開催実行委員会, 2004)。

考察

日動水によってチンパンジーの血統登録が開始されたのは, 1980 年代に国内での飼育個体数が 200 近くになったことを受け, 血統管理の必要性が認識されてか

らである（吉原，1999）。1983年から日動水加盟園を中心に調査を開始し，1991年に初めて「チンパンジー国内血統登録」がリストとして完成し，関係飼育施設に送付されるようになった（吉原，1999）。これにより，当時日本で暮らすチンパンジーのほぼ100%が血統登録され，日本のチンパンジー個体群の概要と各施設における現在の飼育状況などが明らかになった（森村ら，2008；落合-大平，2009；篠田ら，2003）。しかし，当時すでに死亡していた個体に関しては未登録の場合もあり，血縁関係などの情報が欠けるなどして，様々な分析をおこなうには不十分な状態だった（森村ら，2008）。また，国内血統登録のデータに不確かな情報が混じっているため，データの精度をあげる必要性が指摘されていた（森村ら，2008）。

現在の国内のチンパンジーは，性年齢構成がつぼ型になっており高齢化が懸念されている（森村ら，2008；落合-大平ら，2006；吉原，1999）。亜種や近親交配，人工哺育，飼育施設の広さなどの問題もあり，繁殖も進んでいない（落合-大平ら，2006；綿貫ら，2014）。海外からは自由にチンパンジーが入らなくなり，国内個体数も減少している（落合-大平ら，2006；吉原，1999；綿貫ら，2014）。つまり，国内チンパンジーの遺伝的多様性を維持しながら繁殖計画をたてる必要が，早急に求められている。

今回は，各飼育施設への訪問調査に加え，本や新聞などの資料を幅広く調べ上げることで，戦前における日本でのチンパンジーの歴史を明らかにした。この時代の各飼育園館の記録などは，戦争時の空襲などにより失われた場合も多い。そのため，動物園を直接訪問して資料を調べても，戦前部分については保管されておらず，飼育個体などの確認が難しいことも多かったが，それ以外の場所に保管された資料などの情報を統合することで，かなりの部分が明らかになった。この時代はアフリカから野生動物が輸入されることも少なかったため（石田，2010），28個体という調査結果は，実際の状況と大きく異ならないだろうと推測している。

戦前のチンパンジーの飼育では，動物園は動物商や個人から野生由来のチンパンジーの子どもを入手し，できるだけたくさんの来園者に見せ，楽しませようとしていたことがわかる。チンパンジーが来日した後は，できるだけ早く公開し，たくさんの芸を覚えさせ，動物園の“スター”に仕立て上げようとする。本研究の調査でも，動物園のそうした意図が，様々な資料から読み取れた。しかし，母親から引き離され，長い船旅を経て日本に到着したチンパンジーの子どもが，気候の異なる土地で体調を崩すだろうことは想像に難くない。本研究でも，3分の1が1年以内に死亡し，残りの半分以上も5年以内に死亡していたことがわかった。溝井（2014）は，この頃の日本の動物園は大衆化して

おり，入園者は動物に食べ物を与えたり棒でつついたりするし，安い賃金で専門知識のない飼育係を雇っていることなどから，動物の死亡率も高く「動物園でなくて成仏園（じょうぶつえん）」と言われたことを指摘している。日本に来たチンパンジーたちも，こうした日本の動物園の影響を受けたことが明らかになった。

戦争がチンパンジーに与えた影響も大きかった。戦後も生き残ったのは1個体だけという事実から，「戦前のチンパンジーは戦争によってほとんど死滅した」とも言える。野生での個体数減少も，人間による活動が大きく影響しているが（Campbell *et al.*, 2008；Pusey *et al.*, 2008），動物園などの飼育下でも人間活動が与える影響は大きく（アンソニー・スペンス，2007），日本でもそれは例外ではないということを，私達は深く認識するべきだろう。

現在では，動物商や個人を通じての個体の売買も少なくなり，チンパンジーの移動は，目的に合わせて飼育施設間でおこなわれることも多くなった（綿貫ら，2014）。飼育にあたっての福祉的配慮も求められるようになり（松沢，1996；松沢，1999；National Research Council, 1998；上野・森村，2009），飼育環境や方法も変化している（松林，1993；落合・松沢，1999；落合・松沢，2001；平田ら，2012；竹本ら，1996；綿貫ら，2014）。2006年に日本での医学感染実験が停止し，チンパンジーのサンクチュアリが作られるという変化も起こっている（平田ら，2012；松沢，2007；松沢，2013；Morimura *et al.*, 2011；綿貫ら，2014）。このような変化に対応していくためにも，過去の状況を明らかにし，情報を整備しておくことは，重要だろう。今後，これらの情報が日本国内でのチンパンジーの個体数の維持に役に立つことを願いたい。

謝辞

大型類人猿情報ネットワーク（GAIN）は，文部科学省の事業「ナショナルバイオリソースプロジェクト（NBRP）」の1つである。2002年度から始まったGAINの情報収集や蓄積については，山崎由紀子，吉川泰弘，平井百樹，長谷川寿一，倉島治，赤見理恵，打越万喜子ら各氏との共同研究の成果である。GAINのデータベース構築にあたっては，公益社団法人日本動物園水族館協会の生物多様性委員会（旧・種保存委員会）によって作成された，チンパンジー国内血統登録書を利用した。国内血統登録担当園である東京都多摩動物公園の，吉原耕一郎氏をはじめとする歴代の登録担当者の御尽力に，篤く敬意を表したい。各飼育施設での情報収集にあたっては，多くの動物園関係者や飼育関係者に御協力をいただいた。全員のお名前をここで挙げることはできないが，その御高配に深く感謝申し上げる。ウェ

ブやデータベースからは貴重な写真や新聞記事を得ることができた。どちらも公表後 50 年以上経ち、著作権が切れているとのことだったが、資料の管理やデータベースへの登録、ウェブへの掲載など、多くの方々の努力なしでは、これら資料の発見には結びつかなかった。製作された関係者の熱意に敬意を表したい。動物園での飼育情報や写真の使用に関して、東山動物園の橋川央氏と大阪市天王寺動物公園事務所の高見一利氏にはお世話になった。英文要旨の作成については、Luca Morino 氏と今井由香氏、Claire Watson 氏からご指導をいただいた。この他にも書ききれないほどの方々に、さまざまな場面において助けていただいていた。こうした方々、および機関に対し、改めてお礼申し上げたい。

引用文献

- 秋山正美 1995: 動物園の昭和史：おじさん，なぜライオンを殺したの：戦火に葬られた動物たち。データハウス，東京。
- 阿久根巖 1977: サークスの歴史：見世物小屋から近代サーカスへ。西田書店，東京。
- アンソニー L，スペンス G 2007: 戦火のバグダッド動物園を救え：知恵と勇気の復興物語（青山陽子訳）。早川書房，東京。（原本は Anthony L, Spence G 2007: Babylon's ark: the incredible wartime rescue of the Baghdad zoo. Thomas Dunne Books, New York.）
- 青木澄夫 2007: 山田学のアフリカ行。JANES ニュースレター 15: 1-2.
- 朝日新聞社社会部 1977: 東山動物園日記。株式会社ペップ出版，東京。
- 浅倉繁春 1994: 動物園と私。海游舎，東京。
- AZA Ape TAG 2010: Chimpanzee (*Pan troglodytes*) care manual. Association of Zoos and Aquariums. Silver Springs, MD.
- Campbell G, Kuehl H, N'Goran Kouamé P, Boesch C 2008: Alarming decline of West African chimpanzees in Côte d'Ivoire. *Current Biology* 18: R903-904.
- 千葉胤孝 1993: 獣医病理学者より見た動物園の記録。近代文藝社，東京。
- Earnhardt JM, Ross SR, Lonsdorf EV, Pusey AE : 2003 A demographic comparison of wild chimpanzees from Gombe and a managed population from North American zoos. *American Journal of Primatology* 60, Supplement 1: 62-63.
- 福岡市動物園 1993: 福岡市動物園 40 年のあゆみ。福岡市動植物園，福岡。
- Fulk R, Garland C (eds) 1992: The care and management of chimpanzees (*Pan troglodytes*) in captive environments: A husbandry manual developed for the chimpanzee species survival plan. North Carolina Zoological Society, NC.
- Gonder MK, Locatelli S, Ghobrial L, Mitchell MW, Kujawski JT, Lankester FJ, Stewart CB, Tishkoff SA 2011: Evidence from Cameroon reveals differences in the genetic structure and histories of chimpanzee populations. *Proceedings of National Academy of Sciences of the United States of America* 108: 4766-4771.
- 橋川央 2011: 東山の種保存動物 118 チンパンジー。ひがしやま 18: 4-5.
- 林寿郎 1956: アサヒ写真ブック 32 動物園への招待。朝日新聞社，東京。
- 林佐市 1965: 動物園の生立ち。なきごえ 10-11（50 周年記念特集号）：6.
- 平田聡，鶴殿俊史，友永雅己，松沢哲郎 2012: 30 年ぶりの空：医学感染実験チンパンジーがゼロになった。科学 82: 866-867.
- 石田おさむ 2010: 日本の動物園。東京大学出版会，東京。
- 岩本光雄 1987: サルの分類名（その 4: 類人猿）。霊長類研究 3: 119-126.
- 柏原及也 2000: 柏原家家史下巻柏蔭物語。実業之日本事業出版部，東京。
- King NE, Mellen JD 1994: The effects of early experience on adult copulatory behavior in zoo-born chimpanzees (*Pan troglodytes*). *Zoo Biology* 13: 51-59.
- 北王英一 1943: 東山動物園要覧。名古屋市東山動物園，愛知。
- 北王英一，水谷不二夫 1935: 類人猿（黒猩猩，チンパンジー）の肺炎に就て。中央獣医学雑誌 48: 71-81.
- 小出隆司 1983: ゴうれっしやがやってきた。岩崎書店，東京。
- 小森厚 1997: もう一つの上野動物園史。丸善ライブラリー，東京。
- 熊本動物園 1980: 熊本動物園開園 50 周年記念誌。熊本動物園，熊本。
- 熊本動物園 1989: 熊本動物園 60 周年記念動物園ものがたり。熊本動物園，熊本。
- 京都市動物園 2003: 京都市動物園 100 周年記念誌：京都市動物園 100 年のあゆみ。京都市動物園，京都。
- 京都市動物園編集委員会 2013: みんなの京都市動物園：京都市動物園 110 周年記念誌。京都市動物園，京都。
- 毎日中学生新聞編集部 1950: 動物園奇談。株式会社養徳社，奈良。
- 松林清明 1993: チンパンジーの実験医学への利用と飼育・繁殖をめぐる。霊長類研究 9: 145-149.
- 松沢哲郎 1996: 心理学的幸福：動物福祉の新たな視点を考える。動物心理学研究 46: 31-33.
- 松沢哲郎 1999: 動物福祉と環境エンリッチメント。どうぶつと動物園 51: 4-7.
- 松沢哲郎 2007: 連載ちびっこチンパンジー（第 70 回）チンパンジー・サンクチュアリ・宇土。科学 77: 1074-1075.
- 松沢哲郎 2013: 福祉につながる認知研究：チンパンジー研究の新しい展望。発達 133: 96-103.
- 溝井裕一 2014: 動物園の文化史：ひとと動物の 5000 年。勉強出版株式会社，東京。
- 森村成樹，平田聡，倉島治，落合 - 大平知美 2008: 国内飼育下チンパンジーの個体群管理と動物福祉。霊長類研究 24: 17-24.
- Morimura N, Idani G, Matsuzawa T 2011: The first chimpanzee sanctuary in Japan: an attempt to care for the “surplus” of biomedical research. *American Journal of Primatology* 73: 226-232.
- National Research Council 1998: The psychological well-being of nonhuman primates: a report of the committee on well-being of nonhuman primates, Institute for laboratory animal research. National Academy Press.
- 日本動物園水族館協会 1941: 動物園と水族館。第 1 号。
- Oates JF, Groves CP, Jenkins PD 2009: The type locality of *Pan troglodytes vellerosus* (Gray, 1862), and implications for the nomenclature of West African chimpanzees. *Primates* 50: 78-80.
- 落合知美，松沢哲郎 1999: 飼育チンパンジーの環境エンリッチメント：高い空間の創出とその利用。霊長類研究 15: 289-296.
- 落合知美，松沢哲郎 2001: 飼育チンパンジーの環境エンリッチメントを目的とした木造構築物の導入とその評価。動物心理学研究 51: 1-9.
- 落合-大平知美 2009: 大型類人猿を飼育する日本国内の組織について。霊長類研究 24: 405-411.

- 落合-大平知美, 倉島治, 赤見理恵, 長谷川寿一, 平井百樹, 松沢哲郎, 吉川泰弘 2006: 日本国内の大型類人猿の飼育の過去と現在. 霊長類研究 22: 123-136.
- 大阪市動物園 1934: ガイドブック市立大阪動物園. 大阪市動物園, 大阪.
- 大阪市立動物園 1941: 動物二千六百年史. 大枝秀文舎, 大阪.
- 大阪市天王寺動物園 1985: 大阪市天王寺動物園 70 年史. 大阪書籍株式会社, 大阪.
- Pusey AE, Wilson ML, Collins DA 2008: Human impacts, disease risk, and population dynamics in the chimpanzees of Gombe National Park, Tanzania. American Journal of Primatology 70: 738-744.
- 佐々木時雄 1975: 動物園の歴史: 日本における動物園の成立. 西田書店, 東京.
- 札幌市教育委員会 2000: さっぽろ文庫 92 円山動物園. 北海道新聞社, 札幌.
- 篠田謙一, 鶴殿俊史, 吉原耕一郎, 嶋田誠, 竹中修 2003: 分子系統分析に基づく国内飼育チンパンジーの亜種判定. 霊長類研究 19: 145-155.
- 高島春雄 1955: 動物渡来物語. 株式会社学風書院, 東京.
- 竹元博幸, 熊崎清則, 松沢哲郎 1996: 飼育チンパンジーによる植栽樹の採食にみられる選択性. 霊長類研究 12: 33-40.
- 豊橋総合動植物公園イベント開催実行委員会 2004: 動物園ものがたり: 豊橋市動植物公園開園 50 周年記念. 株式会社東雲座カンパニー, 豊橋.
- 筒井嘉隆 1934: 雑録類人猿雑記. 動物心理 1: 125-131.
- 筒井嘉隆 1935a: 雑録類人猿追記. 動物心理 2: 32-33.
- 筒井嘉隆 1935b: リタ嬢一家. 家事と衛生 11: 64-72.
- 筒井嘉隆 1935c: 裸のリタを視る. 家事と衛生 11: 82-88.
- 筒井嘉隆 1987: 町人学者の博物誌. 河出書房新社, 東京.
- 堤秀世 2003: チンパンジーにありがとう. フレーベル館, 東京.
- 上田長太郎 1944: 大阪の動物園. 輝文館, 東京.
- 上野動物園 1982: 上野動物園百年史. 東京都, 東京.
- 上野吉一, 森村成樹 2009: 霊長類に対する福祉的配慮: その考え方と実践. 霊長類研究 24: 385-393.
- 和田辰巳 1965: 大阪市天王寺動物園 50 年の歩み. 大阪市天王寺動物園協力会, 大阪.
- 和田辰巳 1972: 天王寺動物園の思い出. なきごえ 1972 年 7 月号 2-3: 6.
- 綿貫宏史朗, 落合知美, 平田聡, 森村成樹, 友永雅己, 伊谷原一, 松沢哲郎 2014: 日本におけるチンパンジー飼育の変遷 (1926-2013 年). 霊長類研究 30: 147-156.
- 山田学, 山田到知 1940: 動物生態写真集. 山田博物学研究所, 東京.
- 吉田定一 1980: チンパンジー: ゆかいな人気スター. ポプラ社, 東京.
- 吉原耕一郎 1999: 日本のチンパンジーの現状: 国内血統登録から. 霊長類研究 15: 267-271.

Summary

The History of Captive Chimpanzees (*Pan Troglodytes*) in Japan. 1920-1950

Tomomi OCHIAI¹⁾, Koshiro WATANUKI^{1), 3)}, Toshifumi UDONO²⁾, Naruki MORIMURA²⁾,
Satoshi HIRATA²⁾, Masaki TOMONAGA^{1), 2)}, Gen'ichi IDANI^{2), 3)}, Tetsuro MATSUZAWA^{1), 2), 3)}

¹⁾ Primate Research Institute, Kyoto University

²⁾ Wildlife Research Center, Kyoto University

³⁾ Japan Monkey Centre

The Great Ape Information Network has collated and archived information on captive chimpanzees within Japan since 2002. As of July 1st, 2014, a total of 323 chimpanzees were housed within 52 facilities across Japan, all registered in the Japanese Association of Zoos and Aquariums (JAZA) studbook. JAZA has recorded information on captive chimpanzees within Japan since the 1980s. However, for individuals unregistered and/or deceased prior to this period, JAZA holds scant information. There are very few surviving reports on living conditions and husbandry of such individuals, particularly for the years preceding the Second World War (WWII) (up to 1945). Here we present the first detailed history of captive chimpanzees in Japan before WWII, following a systematic investigation of disparate records. The first record of any live chimpanzee within Japan was a chimpanzee accompanying an Italian travelling circus in 1921. The history of resident captive chimpanzees in Japan began in 1927 when a chimpanzee, imported into Japan by a visitor, was exhibited in Osaka zoo. In the 1930s, many chimpanzee infants were imported to Japanese zoos until in 1941 imports were halted because of WWII. By the end of WWII, there was only one single chimpanzee still alive within Japan, “Bamboo”, housed in Nagoya. In 1951, importation of wild chimpanzees into Japan resumed. In total, we identified 28 individuals housed within Japan before 1945, none listed previously in the JAZA studbook. Of these 28 individuals: 6 entered Japan as pets and/or circus animals, 21 were imported to zoos, and one was stillborn in zoo. Of the 21 zoo-housed individuals, 7 died within one year and 9 of the remaining 14 were dead within 5 years of arriving in Japan. Four individuals are recorded to have lived 7-8 years. Only one male individual, the aforementioned “Bamboo”, lived notably longer, to about 14 years.

Key words: captive chimpanzee, history, zoo, *Pan troglodytes*

落合知美 京都大学霊長類研究所
〒484-8506 愛知県犬山市官林 41

Tomomi OCHIAI Primate Research Institute, Kyoto University
Kanrin 41, Inuyama, Aichi 484-8506, Japan
e-mail: tomomi.ochiai.3v@kyoto-u.ac.jp